

からしだね通信

2024
12
VOL.62



- 1 卷頭言
2~5 「私は日本社会にさまよう難民たちの隣人であるか」
2024年7月6日 第4回CLC
からしだね書店トークイベントより
松浦・デ・ビスカルド・篠子さん
6~7 センター・ワークス報告
8 後援会などご協力者さま

物語を聞く

理事長 坂岡 隆司

もう30年も前になるでしょうか。我が家の近所に、Kさんという80歳くらいの婦人が住んでおりました。Kさんは在日韓国人で、どこに行くにもいつも息子さんらしき男性を連れていました。男性は半身にマヒがあり、言葉も話せません。年齢不詳で30代にも50代にも見えました。じつは彼は息子さんではなく、彼が小さい頃、わけあって日本人の親からKさんが引き取ったとのことでした。戦中戦後、在日韓国人としてこの国で生きていくのは、並大抵のことではなかったはずで、差別もあり、理不尽なことも、悔しいこと也有ったようです。どうしてKさんは、障害のある彼を引き取ったのだろう。しかも日本人の子を。そんなことを思っていたら、あるときKさんがこう言いました。「うちちらが暮らしていくのは、この子の年金のおかげやねん」なるほど、と思いました。Kさんは親切で温厚な良い人でした。でも、それだけではなかった。それで良かった、と私は思ったのでした。その後我が家は引っ越したので、母子のその後の消息は不明です。

この夏、私は韓国南部の小さな村ハプチョンにある、被爆資料館を訪ねる機会がありました。今年、日本被団協がノーベル平和賞を受けましたが、じつはあの原爆で被災したのは日本人だけではありません。記録によると、ヒロシマ、ナガサキで、7万人の韓国人が被爆、うち4万人が死亡したそうです。生存者3万人のうち2万3千人が帰国しましたが、そのほとんどがハプチョンなど貧しい地域の出身者でした。韓国人被爆者の存在は長く忘れ去られていました。その辿ってきた道のりは苦難の連続です。資料館の隣にある被爆者福祉会館には、68名の被爆者の方がひっそりと暮らしておられました。平均年齢86歳と聞きました。別の高齢者施設を訪ねた折にも何人かの被爆者の方に会いました。日本語で訥々と、昔住んでいたヒロシマ、ナガサキの町のことなど話されました。ああ、自分は何も知らなかった、あまりにも知らないことが多すぎる、とつくづく思いました。それは何か出来事や信条のようなものについての知識ではなく、例えば一人の人間の生きた証しを「物語」として聞くといったことです。そんなことを考えていると、ふと冒頭のKさんのことを思い出しました。

対話のない、不寛容な今の時代だからこそ、記号や数字や信条ではなく、生きたナマの人間の物語に耳を傾けることが大切なのではないかと思うのです。

私の所属するカトリック大阪高松大司教区では、毎年10月の第3日曜日に「インターナショナルデー」と称して、国際色豊かなミサを大聖堂で行います。この日、最大1500人ぐらいいるマリア大聖堂で行われるミサに来るのは、ほとんど日本社会の中で、孤立して困っている人たちが、カトリック教会にやってくる。

「私は日本社会をさまよう難民たちの隣人であるか?」
の手は「戦争を未然に防ぎ、積極的に平和を作ろう」を活動目標とする組織でした。私は教師をやめて飛び込んでしまった。ところが、全然ダメ。事務仕事は、私に全く向いてなくて全く仕事がきかないのです。それでも、あっさりとお役御免です。がっかりして自信を失くし「もうあかんわ。辞めて教師に戻ろう」と思いました。

事務仕事はさっぱりできなかつたけれど、「人間が好きでしゃあない」という才能が開花。

ところで1990年代初頭は、ブラジルやペルー、フィリピンから大勢の出稼ぎ労働者が日本にやってきた時期です。彼らの中には、不正に解雇されたり、路頭に迷つたり、望まぬ仕事に就かされたりしたケースもあって、自分の信仰する教会に助けを求めて来る人が後を絶ちませんでした。そのような折、当時の「平和の手」の事務局長が、国際的な事務仕事がカラキシだめで辞職しようとしていた私に「カトリック教会に外国人相談窓口を作るから、そこに事務局を作つて働くよ」と助け船を出してくれました。それで今、私がシナピスでやっている活動が始まったのです。いまだに事務仕事はさっぱりできません。でも、ただもう「人間が好きでしゃあない」というそくだけで、今もこの仕事をやってる、そんな感じです。

「シナピス」はラテン語で「からしだね」の意味です。ミッションからしだねと一緒に運動でも、やがて大きな実を結ぶという願いを込めています。どんな小さな関わりでも喜んでやろうじゃないか、ちょっとでも質のよい、もうちょっとマシな社会をみんなで作りたいね、という気持ちで活動しています。



私は日本社会をさまよう難民たちの隣人であるか?

2024年7月6日(土)
カトリック大阪高松大司教区
社会活動センターシナピス
松浦・デ・ビスカルド篠子さん

世界が目まぐるしく変化していく今日、ウクライナやガザでの戦争は終わらず、いろいろな国で政権が替わりリーダーが替わり、12月には韓国で数時間だけ戒厳令が発令され、シナピス社会活動センターで働く松浦篠子さんの講演の一部を掲載いたします。大阪で難民支援に携わっている松浦さんと外籍の方々とのかかわり、また、松浦さんがどうしてこの仕事を就いているのかなどについて、皆様と分からち合えたらと思います。

松浦さんのお話から、日本の中で様々な背景を持つ人たちと共に生きようとする努力は、複雑化した国際社会を生きていくために必要な力になるのではないかと思いました。また、支援者としての松浦さんの言葉から、支援することはどういうことなのかを問われたような気がしました。

「シナピス社会活動センター」ってどんなところ?

大阪市中央区玉造にあります。シナピスとはラテン語で「からしき」という意味です。からしきはとても小さいのですが、成長すると大きく育ち葉を茂らせます。シナピスは、福音を土台に、イエス・キリストの生き方に倣う大阪高松大司教区(大阪・和歌山・兵庫と四国四県のエリア)社会福音化部門の事務局として、信徒の社会活動をサポートし推進しています。そして、大阪高松大司教区の各地区の社会活動委員会と連携し、人権の尊重と正義に基づく平和な世界の実現をめざして、ともに学びながら実践に取り組みます。

シナピス社会活動センターの出会い

シナピスとミッションからしだねとは2020年、コロナ禍最もひどかった時に出会いました。病院や介護施設で医療用ガウンが不足した時期に、シナピスの外国籍の方たちに、医療用ガウンを作つていただき、そのお返しに、からしだねからシナピスの活動費のための寄付をしたのがきっかけでした。またCICからしだね書店を始めるときには、重い本や備品の運搬を手伝つていただいたりもしました。

犬養道子さん マザー・テレサとの出会い

80年代は犬養道子さんの『人間の大地』がベストセラーなった頃でしたが、この著書には私も非常に感銘を受けました。犬養さんが大学に講演に来たことがあって、ナマの大養さんの話を聞いて心を揺さぶられたのを覚えています。また私の在学中にはもう一人、マザー・テレサが大学に来ておりました。インドから来たとても小さな老シスターは、英語が苦手な私も聞き取れるわかりやすい言葉で語りかけました。マザー・テレサの講演は私の心に響きました。「短い一生、一回しかない人生、この人のような仕事を引き起す」など本当に思いました。

1991年に今のシナピスの前身「平和の手」というカトリック教会の運動組織で働くことになったのです。「平和の運搬を手伝つていただいたりもしました。

シナピスの人達が作つてくれた医療用ガウンを着た医師や看護師さんたちが、たくさんのコロナの患者さんを救い、からしだねワークスは隣がいを持つ人たちの仕事の場として書店を開くことができました。

松浦さんの仕事と、「難民」

私は、司祭でも修道者でもない一般人で、カトリック大阪高松大司教区と雇用契約を結んで働いています。社会をもう少しだけ良くしようと、という活動(それを私たち社会の「福音化」と呼んでいます)をしています。私は大学卒業後すぐミッションスクールの社会科と宗教科の教師をしたのですが、いつかは難民に関わる仕事がしたいと思っていました。「難民」は高校生ぐらいの時から私の中で引つかかってきた言葉で、難民と聞くと心がざわざわしたものでした。すぐ身边には、ベトナム難民がたくさんいました。

1980年代、インドシナ三国から1万人もの難民が日本に入つてきましたが、それは私がちょうど大学生の頃で、私のすぐ近くには、ベトナム難民がたくさんいました。シナピスの人達が作つてくれた医療用ガウンを着た医師や看護師さんたちが、たくさんのコロナの患者さんを救い、からしだねワークスは隣がいを持つ人たちの仕事の場として書店を開くことができました。

日本で暮らし始めて、困りごとを抱えた人たち で、例えば、どんな人?

ミサに来て、ほつと佇んでいる人が、「実は私にはこういう悩みがついて」とか「こんなことで困つていて」というようなお話をされることがあります。シナピスに来る相談者の圧倒的多数は海外出身者です。日本に来て間のない人、どこにアクセスしたら助けてもらえるのかわからんない人たちが、自分の信仰する教会の十字架を見つけると、そこへ行って悩みを打ち明ける気持ちになるのかもしれません。場所などだと本当に思います。

日本の法制度の保護下にいない人たち

シナピスで受けた相談で特徴的なことは、法制度の保護の外に置かれている人たちが多いことです。在留資格を持ついればその人たちは日本人と同じ行政サービス受けることができます。教育関係で困つたら教育委員会、労働災害にあつたら労働や労働基準監督署に行けばよいのです。けれども、法制度の保護の外に置かれている人たちというのは、何らかの形で在留資格を認められず住民登録ができるない人たち、すなわち非正規滞在者(不法滞在者)で彼らは行政支援の網からごぼれ落ちる存在です。

「法に触れた人は日本から出ていいてもらうべきだ」という意見に、異論はありません。私たちの社会は法のもとの平等で成り立つていますから、法に触れる人は然るべき制裁を加えられ、あるいは国外退去を命ぜられるのが筋です。ただその中には、どうしても自分の国に帰れない事情を持つ人がいるのです。そういう人たちをどうするかが私たちに日本人に突きつけられています。

シナピスで関わった「非正規滞在者」の例を挙げます。

一つは在留カードの期限が切れたことに気づかない人。かつて外国人登録制度があつた頃には、更新時期が来たら通知がきていたので更新手続きを忘れる人はあまりいなかつた

松浦さんは、2024.12.22 の
NHK-E テレ「こころの時代」に
出演されました

「松浦さん、なぜあなたは燃え尽きでしまわないんですか?」とよく聞かれます。難民認定を勝ち取れたか否か、在留許可を得たか否か、勝率で言えば、6割から7割は負け戦であります。外国人への定住の道を拓くことができなかつた無念さ。それ以外に支援した相手に裏切られる事、嘘を吐かれる事ともいっぱいあります。身元保証人になつたけれど、当事者が警察に捕まつてショッピカれていくのを見るとか、入管に連れていかれるのを見るとか、親子が引き離されるのを目撃する当たりにするとか…。強制送還される人を飛行場で見届けたときは、その人がこれから自分の国でどんな目にあうのか予測がつくので今生の別れになる可能性が高いです。空港でどれだけの人に言われたかわかりません。「日本はひどい国。日本で散々なめにあつた」と。

自己責任、自業自得、悪いことをしたんだから因果応報。「あんたが悪いんやからしかたない」つていうのと、命にかかるることは違う。

のですか 在留カード制度に変わつてからは一切通知がこなくなりました。高齢者や一人暮らしの方がたは通知がこなったのに気づかず「手続きを放置」してしまい、ある日、「在留カードの更新がないので 住民登録抹消 在留資格はく奪強制送還」と告げられるのです。永住資格を持ち余生を日本で暮らす高齢者がカードの更新義務を知らなかつたために不法滞在者として、存在そのものを脅かされる事態に陥ります。

そのほか、なんらかの理由で在留資格を失つたまま、長年日本に定着して暮らし、本国にはもう生活基盤がない人もいます。1980年から1990年代初頭の頃、日本はバブル絶頂期で外国人の労働力が必要でした。そのほとんどは「出稼ぎ労働」をして帰国しましたが、本国が内戦状態だつたり、家族に問題を抱えたりしていてなかなか帰れないという人もいて、長期滞在になると仕事や家族 暮らしの基盤は日本になつてゆきます。本国にいた親兄弟は他界し、本人も歳を取り母国には居場所も働くすべもありません。

中には未成年の子どもたちの問題もあります。在留資格のない両親のもと日本で生まれ育つた外国籍の子どもたちです。親に在留資格がないと、子どもたちは生まれながらにして不法滞在者として「いてはいけない存在」になります。国際条約の規定に則つて、子どもの生存権 家族との統合が脅かされていると、私たちは裁判などで何度も訴えましたが、行政も司法も「日本では法務大臣の裁量が国際条約の上に立つ」と、子どもの在留特別許可をほとんど認めません。

「不法滞在者」「不法入国者」というと、私たちは恐ろしい犯人者と思われるかもしれません。ですが中には、上記のように日本社会で生きていく権利をもつてもよいのではないかという人たちも確実にいるのです。

とをその人は私に教えてくれました。

そんな私は、定住許可を得られず無念でいっぱいの人を自送る立場に置かれることが多いです。心が凹むのですが、ねる人に言われた言葉が忘れられません。その人はアフガニスタン人でしたが空港で、こう言つてくれたのです。「ひどい日本だつたけど一つだけ。松浦さん、あなたに会えて良かつた」そう言いわれた時に、私はやっぱり次もやろうかつてなります。大事なのは、救えたか救えなかつたかではなく、私たちが一人の人と、どういう風に関わっているかだというこ

難民問題は深刻です。

かという人たちも確実にいるのです。

犯罪者と思われるかもしれません。ですが中には、上うに日本社会で生きていく権利をもらつてもよいの

行政も司法も「日本では法務大臣の裁量が国際条約の上に立つ」と、子どもの在留特別許可をほとんど認めません。

て不法滞在者として「いてはいけない存在」になります。国際条約の規準に則って、子どもの生存権、家族との統合が脅かされていると、私たちは裁判などで何度も訴えましたが、

口にいふ先生の二点がかかる問題を聞いて、在留資格のない両親のもと日本で生まれ育つた外国籍の子どもたちです。親に在留資格がないと、子どもたちは生まれながらにして

になつてゆきます。本国にいた親兄弟は他界し、本人も歳を取り母国には居場所も働くすべもありません。
中には未成長の子どもたうの問題もあります。

稼ぎ労働」をして帰国しましたが、本国が内戦状態だつたり、家族に問題を抱えたりしてなかなか帰れないという人もいて、長期滞在になると、仕事や家族、暮らしの基盤は日本にな

日本に定着して暮りし、本国にはもう生活基盤がない人もいます。1980年から1990年代初頭の頃、日本はバブル絶頂期で外国人の労働力が必要でした。そのほとんどは「出

て暮れす高齢者かカーネの更新義務を知らなかつたために不法滞在者として、存在そのものを脅かされる事態に陥ります。そのほか、なんらかの理由で在留資格を失つたまま、長年

のですか 在留カード制度に変わってからは一切通知がこなくなりました。高齢者や一人暮らしの方がたは通知がこなくなつたのに気づかず「手続きを放置」してしまい、ある日「在留カードの更新がないので 住民登録抹消 在留資格はく奪強制送還」と告げられるのです。永住資格を持ち余生を日本

く日本で働いていた。だったら良いの

「あの人は就労目的で日本に来て難民申請をしている」とよく言われます。今日、ぜひ皆さんに知っていただきたいのは、勤労意欲と難民であることは、全く矛盾しないということです。自分の国で殺されそうになつたから逃げて日本で難民申請をしている人も、自分が生きていくためのお金は稼がなくてはいけません。人は働かないと食べてゆけません。人手不足だという日本、たくさんの空き家が出ているという日本、このままだといつか人口が3000万人になつてしまふと言っている日本で、勤労意欲のある難民移住者たちにはしっかりと働いていただいて、税金もたくさん払つてもうらつたらよいのです。彼らは必死で働きますよ。日本社会を支えてほしいという日本人のエゴのためにも、彼らには気持ちよく日本で働いていただいたら良いのではないかと思います。

アフガニスタン難民との出会い

私が初めてアフガニスタンの難民の人会ったのは、今から四半世紀ぐらい前です。1999年の頃です。今ならタリバンと聞けば、アフガニスタンのイスラム原主義の集団だと知られていますが、当時の私は中央アジア情勢を全く然知りませんでした。アフガニスタンの難民が直接シナビスにやつて来て「私たちはタリバンに追われている。助けてくれ」と言いました。「タリバンで何?」っていう話だったですね。当時のタリバンの写真をお見せしますがタリバンの少年兵が持っているのは、人の手と足です。当時のアフガニスタンは無法状態で国土の95%以上をタリバンが実行支配していたと言つてしまいますが、ノト・ヌスが関わつたアフガン難民の人

「あなたが、助けてください」と名指しで
言われて

小さな支援活動を続けていたシンナビスは、国際的な大きな難民問題に関わったことがなかったので、難民が保護を求めて来た当初は、「いやそんな大きいことは、私たちにはできません。アムネスティインターナショナル等へ行かれたらどうですか」と言いました。「いえ、カトリック教会さん助けてください」と、イスラムの方に言われました。「わかりました。やってみましょう」とやり始めたのが運のつきです。これが私のライフワークにもなる難民支援活動の始まりでした。

とはいっても、小さな一団体ではとても手に負えないでの私は、関西一円の支援団体に声をかけてゆきました。すると一緒に難民支援をやろうと一気にたくさんの人たちが集まってくれてチームをつくることができました。21世紀に入り、アフガニスタンの他、ビルマ、ナイジリア、イランなど関わる難民の出身国は多様化しましたし数も増えました。西

人はやっています アフガン難民300万人 そのうちの何百人かが、日本にも逃げてきました。そしてそのうちの何人が関西地域に埋もれるようにして生きていました。

「松浦さん、これカトリック教会さんが助ける価値がある人ですか？」私は言葉を失いました。それぐらいカトリック教会は間違つて認識されているのか。「カトリックのブランドが傷つきますよ」との言い方でした。カトリック教会のブランドとはいつたい何なのか。私はナニクソ今見ておれーと思ってアリさんを助けることにしました。日本ではどうしても無理だったのですがスペインとかブラジルとかカトリック教会のネットワークを手あたり次第当たって助けてくれるNGOを探しました。そうしたらスペインでアリさん一家を助けようといつた方が出てきました。イランのスペイン大使館がアリさん一家に直接をするところまでこぎつけました。私たちは大喜びで、私なんかスペインに行こうと身構えていたのですが、残念ながら直前にビザ発行不許可となり、アリさん一家は奈落の底に突き落とされました。絶望で歯を食いしばるあまり、アリさんは歯が砕けて抜け落ちてしまいました。

抜群だといします

私たちとは、組織でも個人でも、それぞれの持ち場で、出会つた一人の人を大事にする、支援とはそれにつきると思います。ミッションからしだねでなさつてある支援は、私にはできないですが、めげずにがんばつてある皆さんを見ると、私も自分の持ち場でがんばろうと励されます。シナピスはシンナピスで、からしだねはからしだねで、一人の大事な人と出会い、その後ろに同じように繋がる人がいるんだという思いで、励まし合つていけたらうれしいです。



2024年が終わるとしています。今年もからしだねセンターの業務を通し、たくさんの方からさまざまな相談を受けました。その中で、とても強く印象に残っていることをみなさまとシェアさせていただきます。

薬物がやめられないAさんは、ここ数年、病院や刑務所以外で年末年始を過ごしたことがありません。「薬で人生がぱあになった」と、もはや自分でも、人生をあきらめているようなところがありました。

そんな彼がボソッと言つた一言が忘れられません。

「薬物で頭を飛ばす以外どうしようもなかった」と。

厳しそうな現実を直視しながら生きることは、当時のAさんにはできなかったのです。その現実を生きるために「頭を飛ばすしかなかった」のでした。それは「サバイバル(生存する)のための薬物だったのかな」「それが無かつたらどうなつていたんだろう…」とAさんに関わりながら考えるようになりました。

それまでの私は、薬物に手を出すのは、本人が短絡的な「快楽」をむさぼった結果としての薬物依存だ、苦しむものもある意味自己責任、どこかで突き放していたところがありました。

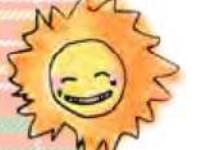
しかし、サバイバルのための薬物…これをAさんとのやりとりで感覚的に知った時、目の前のAさんに対する見方が変わったように思います。「よう生きのびはつたなあ」「薬物でぱあになつた人生取り返してな」とそんな思いがいっぱいになりました。

からしだねセンターで関わっている人たちの何人かが、この日本に住みながら「明日の食べ物がない」状態になりました。計画的にお金を使わず、散財した結果なのですが、食べられない状態は、そこに関わっている者として放置できません。フードバンク等から次の保

センター報告



主任 鍋島愛信
(精神保健福祉士・社会福祉士)



主任 武山世里子
(精神保健福祉士・相談支援専門員)

ワークス報告



主任 鍋島愛信
(精神保健福祉士・社会福祉士)



いつも「からしだねワークス」に関心を持っていたとき、応援・ご協力頂いておりますこと、心より感謝申し上げます。

2024年も間もなく締めくくりを迎えようとしています。12月まで大きな事故や支障も無く無事にからしだねワークスの活動を続けて来ることができました。しかし振り返ると、元旦の夕方には能登で地震があり、心が押しつぶされる思いがしたことを今もリアルに思い出します。1月6日からからしだねセンターの武山と七尾市に入りましたが、道路があちこちで隆起陥没し、また断水が続く状況は本当に厳しいものでした。その時は奥能登(輪島、珠洲など)には入る事すらできず、更に厳しい状況でした。その後も、復旧復興はなかなか進まず、そんな中で水害による更なる被害が追い打ちをかけることとなり、被災者の心情は察して余りあるものだと思います。引き続き被災地の事を忘れず関心をもちつづけ、できるところを考えて、行動していきたいと思っています。

もちろん災害は他人事ではなく、からしだねのある京都でも、南海トラフ巨大地震に伴い震度6強以上が予測されており、市内の被害想定は甚大なものになっています。

2024年4月から福祉事業所にBCP(事業継続計画)の策定が義務付けられ、からしだねでも2023年から策定を進めて来ましたが、実効性のある計画を整えるのはなかなか大変なことでした。万一对の非常

講費が支給されるまでの食糧を届けてもらひうように調整しました。

少し話が変わりますが、私は個人的に毎週日曜日、西成のあいりん地区に通っています。そこでは、1日に何度も、さまざまな団体がやって来て、「炊き出し」や「物資配布」を行います。そこには長蛇の列ができます。よく耳にした会話の中にこんなものがありました。「食べもんはここでもうて、酒買うわ」とか「パンばかり飽きた、もつとええもん持ってきて」「おにぎりよりたばこ配って」

炊き出しや物資の配布をしている団体は、「貧しいあいりん地区の人たちに少しでも役立てほしい」という善意でさげられた寄付金によつてそのような食事を提供していると思うのですが、そこにいる人は食べる物が買えない「貧しい人たち」はほとんどいません。いろんな事情はありますが、それぞれに生活保護や年金を受けていると聞いています。食料配布があるので、「ただ飯」をしているようです。浮いたお金が何に使われているのか、簡単に想像できます。その姿は私にはどうしても「幸せそうな人たち」には見えないので。

そして炊き出しに並ぶ人たちが、からしだねでフードバンクを調整している人たちと重なります。炊き出しや物資の無料配布を通して、それを受け取る人が幸せになってくれればとても素晴らしいものになるのですが、それを受ける人たちが「ただ飯」に慣れきって当たり前になつた時、何か大切なものを失つているように思えて仕方がないのです。

支援とは何なのか、今年もその「問い」を考え続けたからしだねの1年でした。

答えはきちんとでないし、何もできないような無力感を感じます。人として大切なものを大切にすること、それだけはぶれないでいよう…そんな願うような思いを、さらに強く感じるクリスマスを迎えています。

年に、からしだねの事業をどのようにして継続させるのか?また、からしだねだけが機能を回復しても周辺の状況や取引先、インフラなどが復旧しなければ活動再開はかなり先の話になってしまいます。

事業が再開できなければ就労支援は成立せず、施設の収入も断たれることになり、からしだねワークスの継続ができなくなってしまいます。そうならないために、からしだねワークスでは広域の大災害時には既存の事業の復旧に取り組みつつ、災害時ならではの活動に軸足を移した事業継続計画を立て、利用者の働く場と工賃、施設収入を確保し、地域の復旧・復興に貢献できるよう準備を推進しています。

まず利用者と職員の命を守る。そしてひとつ事業所だけでは限界があるからこそ、地域の中で様々な関係・ネットワーク・つながりを育っていく。これらのことを見ながら考へ、備えておくこと。そこからしか復旧・復興・事業継続は実現しないと考えています。

各地で頻発する様々な災害に対する備えをしつつ、2025年は平和で災害の無い平穡な日々を切に願つことです。

今年一年も本当にありがとうございました。来る2025年もからしだねワークスの働きに注目していただき、ご支援・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



「社会福祉法人ミッションからしだね」は、地域で暮らす障害者の福祉をはじめ、社会の様々な課題に積極的に取り組んで行こうとしています。後援会はこの働きを支えることを目的としています。ぜひご協力ください。
からしだねの機関誌の他、ブックカフェの情報、催し物のご案内などをお届けします。

2024年6月27日～2024年12月21日

ご寄附者 (CLCからしだね書店支援ご協力者様含む)

青木理恵子様、一村洋子様、インマヌエル京都西教会様、インマヌエル京都伏見教会様、インマヌエル枚方キリスト教会様、江口真理様、加藤哲也様、株式会社都ハウジング様、川又俊則様、北村栄一様、君村昌様、木村明美様、近藤宏様、近藤栄恵様、齋藤洋三様、櫻井郁夫様、清水昇蔵様、杉島佳子様、砂川晋治様、砂川靖子様、税理士法人ブレインズ様、田中淳様、田村久子様、小笛明様、出村紫野舞様、戸谷御国様、那須佳子様、鍋島久代様、生川鉄平様、日本国際ギデオン協会京都支部様、ノートルダム教育修道女会様、野崎康明様、白泰九様、濱名正子様、林貞子様、深谷与那人様、不破弘様、松栄純子様、松田和代様、三谷洋子様、宮田咲子様、森尚江様、森本典子様、山本裕子様、李喜惠様、脇巣様、株式会社Motion Info様、株式会社田中工務店様、前波明子様、匿名様

後援会ご協力者

青木秀次様、青山郁夫様、磯野純子様、伊藤順子様、井上京子様、岩田和子様、大窪美祈様、大嶋紗綾子様、大山悠子様、長田啓子様、垣見美子様、梶村慎吾様、加藤哲也様、川合くみ子様、河島朝子様、川瀬勝也様、河原良治様、岸川萌木様、北山忠生様、桐山起世子様、窪寺俊之様、倉信範子様、小金丸幹夫様、小柴順子様、小島悦子様、近藤宏様、近藤栄恵様、櫻井郁夫様、清水昇蔵様、杉島佳子様、砂川晋治様、砂川靖子様、田上三郎様、高矢祐子様、武山忠弘様、多田出佳代子様、谷暢宏様、谷内文子様、玉田貞子様、田村久子様、丹野敏弘様、出村紫野舞様、寺井直江様、中村博子様、中村禮子様、那須佳子様、鍋島久代様、西村英司様、野村武夫様、橋本久美子様、畠野研太郎様、濱名正子様、林貞子様、姫野眞知夫様、広岡貞之様、廣田正子様、深谷与那人様、藤原まさ子様、細見忠雄様、本多倫子様、前川洲子様、松栄純子様、松岡弥生様、松本聰子様、松本美穂様、三浦良夫様、宮田咲子様、村岡忠至様、森尚江様、森本典子様、安川寿之輔様、山崎信義様、山崎恵子様、山崎春幸様、山本和美様、和田義則様、和田早智子様、渡瀬富美江様、渡邊日登美様、渡辺芳子様、井上清治様、株式会社田中工務店様、江口真理様、前波明子様

後援会入会・継続には、同封の振込用紙をご利用ください。

寄付金控除領収書をご希望の方は、振込用紙の通信欄に「寄付用領収書希望」とお書きください。

年会費 個人様 1口 3,000円
会 費 団体様 1口 10,000円

振込先 郵便振替
口座番号 00970-2-222380
加入者名：社会福祉法人ミッションからしだね後援会

万が一、
よじ一報酬
よわしくて
あたさが
お騒
いいまじめ
いたしま
うりきま

助成金で

みずほ号 買い替える事ができました



14年にわたり約
10万キロを走ってくれた配食サービ
スの配達用車両「みずほ号」を今回も
みずほ福祉助成財団様の助成金をいた
だき買い替える事ができました。
11月23日に納車されましたが、

安全装備も充実し燃費も良く、毎日安心快適に配達や訪問に使わせて
頂いています。本当に有難うございました。



からしだね館のホーム
ページにアクセス↓



編集後記

◆2024年も、たいへんお世話になりました。からしだね館のことを心におかけください、ご支援ご協力くださった皆さまに心より感謝いたします。今年は、SNSなどインターネットがもたらす社会への影響の大きさを知った年と言えるのではないでしょうか。名のある銀行やクレジットカード会社の名前で、大量の詐欺メールが来るのも慣れてしまい、闇バイトと称した強盗殺人が横行しました。◆その一方で、世界の反対側で起きている出来事が、画像や動画となって瞬時にスマホに届き、それに応えて地球の裏側から誰かを助けようと動きだすこともできるようになりました。◆手間や人手のかかる紙媒体のメディアはどんどん縮小されつつあります。からしだねワーカスが営む書店も、年々厳しい状況に追いやられています。◆ネットの情報あれ、紙媒体の情報あれ、受け取る側の一人ひとりに、それらの情報を自分の中で精査・処理していく能力が必要な時代になったと思います。◆今回特集した外国人支援は、一人ひとりの顔が見える関係性の中で築かれてきたもの、生身の人間の暮らしの中で営まれているものです。◆クリスマスは、イエス・キリストが「生身の人」となってベツレヘムの馬小屋にお生まれになったことを喜ぶ日です。どうぞ良いクリスマスと新年をお迎えください。来年もまたよろしくお願ひいたします。[M.S.]

次号は2025年7月の予定です！